

## 比較生産費の原理

比較生産費が国によって異なることが貿易の行われる理由であるというのがリカードの「比較生産費の原理」である。この原理を応用して、一国内の経済についても、なぜ人々が異なる職業に特化し、それによって交換が発生するかを説明することができる。

I. 国際貿易の理論： リカード (1817) 『経済学および課税の原理』第 VII 章による。

A. 二国の生産可能性

必要な労働投量

	イギリス	ポルトガル
毛織物	100	90
ぶどう酒	120	80

B. 比較優位と貿易の利益

1. 絶対優位と比較優位

a. ポルトがうは両方の生産に絶対優位

生産費の比較

	イギリス		ポルトガル
毛織物：	100	>	90
ぶどう酒：	120	>	80

b. ポルトガルはぶどう酒に比較優位 (イギリスは毛織物に比較優位)

(1) 比較生産費： 生産費の比

比較生産費の比較

	イギリス		ポルトガル
$\frac{\text{ぶどう酒の生産費}}{\text{毛織物の生産費}}$ ：	$\frac{120}{100}$	>	$\frac{80}{90}$
$\frac{\text{毛織物の生産費}}{\text{ぶどう酒の生産費}}$ ：	$\frac{100}{120}$	<	$\frac{90}{80}$

(2) 比較生産費の意味

毛織物のぶどう酒に対する比較生産費： $\frac{\text{毛織物の生産費}}{\text{ぶどう酒の生産費}}$

毛織物の生産に掛かる社会的機会費用

毛織物 1 単位の増産によるぶどう酒の減産の大きさ

各国は、他国より比較生産費が低い産業に比較優位を持つ。

2. 貿易の利益

a. 労働の再分配による生産量の変化

生産量の変化

	イギリス	ポルトガル
毛織物	+ 1.2	- 1.0
ぶどう酒	- 1.0	+ 1.1

b. 貿易後の最終消費量の変化： 毛織物 1 単位対ぶどう酒 1 単位の交換

最終消費量の変化

	イギリス	ポルトガル
毛織物	+ 0.2	0.0
ぶどう酒	0.0	+ 0.1

c. 二国の総生産量 —— 利用可能な労働量が二国とも 1000 である場合

(1) 毛織物とぶどう酒の交換比率が 1 対 1 である場合の総生産額

イギリスの生産可能性

毛織物	10.0	9.0	8.0	...	2.0	1.0	0.0
ぶどう酒	0.0	0.8	1.6	...	6.7	7.5	8.3
総生産額	10.0	9.8	9.6	...	8.7	8.5	8.3

ポルトガルの生産可能性

毛織物	11.1	10.0	8.9	...	2.2	1.1	0.0
ぶどう酒	0.0	1.3	2.5	...	10.0	11.3	12.5
総生産額	11.1	11.3	11.4	...	12.2	12.4	12.5

(2) 完全特化

(a) 各国はそれぞれ比較優位を持つ産業に完全特化することによって、総生産額を最大化できる。

(b) 交換比率が二国の比較生産費のあいだに定まるとき、同様のことがいえる。

II. 国内経済への応用： 異なる職業への特化の説明

A. 国と国の関係と人と人の関係の類似点

1. 得意とする仕事は人によって異なる。
2. 一人の人の労働時間は他の人の労働時間に移すことができない。

B. 国際貿易の理論の応用

1. 産業 → 職業
2. 総生産額 → 所得

参考文献

教科書 . 第 1 章 , 11-16 ページ .